

古活字版『八帖本花伝書』覚え書き

竹本 幹夫

室町時代末期成立の能・謡・囃子伝書集である『八帖本花伝書』（『風姿花伝』とは別本）は、写本・版本（古活字本・整版本）を問わず、きわめて多くの伝本が現存する。このうち古活字本については、川瀬一馬博士の手で早くに整理がなされており（『古活字版の研究』など）、現在でも氏の学説がほぼ定説となっている。川瀬氏説によれば、「古活字印本は活字の様式の差異によって大別して兩種、更にその各々の異種版を分つと五種に達する」（前掲書。以下の引用も同様）由であり、第一種本（イ）は最古刻本で、これには再版（ロ）があり、「笛の図・人形の図等は整版を部分的に使用せり」とされる。そして「以下の古活字印本諸本は皆本書（イ）を基としている」。一方これに対する第二種本は、「第一種本に基づく後刻重版」で「図版等も全て新雕なり」とされている。

たしかにいわゆる第一種本と第二種本を並べて一瞥すると、前者の方が版面がゆったり

としていかにも先印本であることを思わせ、第一種本では平仮名表記になっている部分を漢字で記したりすることで字数を節約した第二種本は、後印本の印象が強い。しかしながら、この兩種本の関係は、あるいはもう少し複雑なのではなからうか。

川瀬博士が紹介された伝本の多くは安田文庫蔵本であるが、そのすべては早稲田大学演劇博物館安田文庫本として現存する。最近それら（第一種本イ・ロと第二種本イ）を閲覧する機会があったが、その時、ちょっと変わったことに気付いた。巻五「それ能といふ事」に舞の図三丁半と人形図八丁とが収められているのであるが、後印本であるはずの第二種本の絵図の方が、先印本の第一種のそれよりも明らかに古態をとどめるのである。

まず舞の図であるが、

- (1) 神舞の事・序の舞事 / (2) 綿木
 ほかの舞の段・安宅の舞の図らしきもの
 / (3) 邯鄲の楽・下り端の舞 / (4)

常の章の破の舞

の順で三丁半になるのが、第一種本をはじめ整版本にいたるまでの構成である。これに対し第二種本では3・1・2・4の順に配列され、第二種本の覆刻整版本でもこの順なのである。この絵図の直前には「邯鄲」の楽の秘伝に関する記事があり、絵図と関連するような内容の記事はほかにないから、これは「邯鄲の楽」の舞図が冒頭にある第二種本の配列の方が本来である可能性がある。しかも舞台図の方形の枠を比較すると、第一種本（イ・ロ）はいずれもその四隅がきれいに直角をなすのに対し、第二種本（イ）はすべての図の四隅がずれて隙間がある。第一種本の図は一枚の版木に彫られた整版であるのに対し、第二種本（イ）の図は古活字で組まれていることが明らかである。少なくともこの部分については、第二種本の方が古態に近い。

- 人形図では、第一種本は次の八丁からなる。
 (1) 胴作りせざる人形・胴作りの好例
 / (2) 三輪楊貴妃の胴作り・定家の後の胴作り / (3) 鬼や悪尉など腰の掛け様と胴作り・男能腰の掛け様 / (4) 尉の類腰の掛け様と胴作り・いづれも白衣にて出候女房の胴作り / (5) 百万の胴作り・鬼の類悪尉の類杖のつき様 / (6) 老女の杖のつき様・盲目の杖のつき様 /

(7) 杖つく幽霊・尉の類直面の男つく
ばひ様 / (8) 女房の下に居る胴作り・
融の後に居る時の扇持ち様

第二種本(イ)ではこれと逆の順番で各丁が綴じられるが、胴作り↓杖つき様↓つくばひ様↓扇持ち様と続く第一種本の編成が本来のものと思われ、第二種本の綴じ違えなのであろう。ただしこの綴じ違えは覆刻本にも踏襲されており、該本独自のものではない。

この人形図は第一種・第二種両本とも整版で、字配りや文字遣いがほぼ一致するものの、両者は明らかな別版である。そしてこれも第二種本(イ)の方が古態に近いのである。すなわち絵図自体が第二種本の精密で丁寧なのに対して、第一種本は粗雑でなおざりである。顔の造型なども、第二種本は小鼻をきちんと形良く描くのに第一種本の絵では片仮名のムに近いなど、かなり線が崩れており、より後代の模刻と断定したい印象である。

絵図の説明文も、第二種本の「見にく、候」に対して「見にて候」(楊貴妃三輪)、「扇をたてに(尔)持」に対して「扇をたてよ(与)持」、「かり衣(加り衣・狩衣)」に対して「な(奈)り衣」(いずれも融)と、第二種本と同書体の本文を誤刻した例が見える。また「能によりかせ杖つくあり、ただのをつくあり」とある後半を「たけをつく有」とする

例(鬼・悪尉)などもある(管見に入った異文は全六例)。少なくとも初めの三例は第一種本が先行しないことを示している。

ここでさらに付言したいのは、両種本の人形図の説明文が、明らかに古活字版からの覆刻整版であることである。いずれも古活字版にはあり得ない六文字以上の連字体を多用しながら、字間が不揃いであったり文字の位置にゆがみやずれがあったりするものがその証拠となる。この絵図の部分のみに関しては、両種本はともに同一の古活字本からの覆刻で、第二種本(イ)の方がより原態に近いと考えてよいようである。

以上の事例は必ずしも第二種本(イ)自体の刊行が第一種本に先行することを意味しはしないのであるが、同時にまたその逆の場合も断定的に想定はできないことになるのではなからうか。現存の第一種本(イ)以前に絵図の部分の大半も古活字であるような本が存在したであろうことはたしかであろう。その本と現存第一種本(イ)との関係が絵図部分のみの覆刻であったのかどうか、第一種本と第二種本との前後関係は厳密にはどのようなものかなど、今後考察すべき課題は多い。今は一例として部分的な小異をあげつらうのみに止めておきたい。

(早稲田大学助教授)